

# 橋爪大三郎氏に聞く

## インタビュー

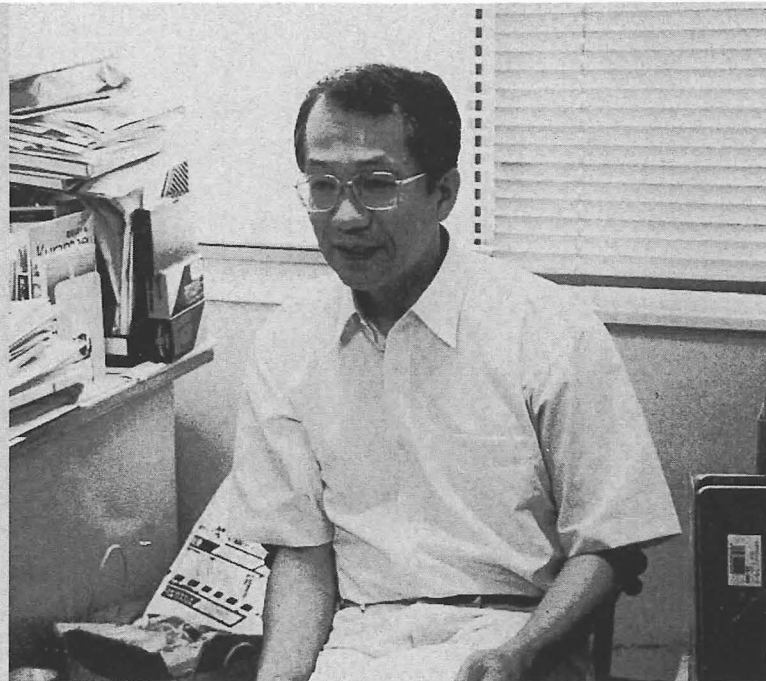
(聞き手)

関 勇豪

(千葉市立園生小学校)

鶴澤 和生

(千葉市立本町小学校)



東京工業大学の研究室を訪れ、選択・責任・連帯について話を伺うことができました。選択・責任・連帯という言葉は、様々な教育改革をめぐるマスコミの報道の中にキーワードとして出てきます。今日という時代の一つの要求でもあるようです。

### ●橋爪 大三郎氏

1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。95年より東京工業大学教授。専攻は社会学。著書に「はじめての構造主義」、共編著「研究開国」、「選択・責任・連帯の教育改革」など。

## 教育の基本とは

関 著書「選択・責任・連帯の教育改革」の中で「今の教育・学校システムだったら私がもう一回生まれ変わったとしても学校には絶対行きたくない」とおっしゃっていますが、先生目から見た教育の現状をお話し下さい。

橋爪 どんな集団や組織にも、それに加わるメリットがあるはずですね。むしろ少しは我慢しなければならぬことやマイナスもあるでしょうが、

生きていくからにはしょうがない。マイナスよりもメリットの方が大きいからまあいいや、と考えるからみんな我慢して生きているんじゃないですか。中には、こんなところにはいたくないという、ひどい集団もあるかもしれませんが、そしたらやめればよいわけですよ。やめる自由がもしゼロだったら、息が詰まってしまうですね。

ところで学校はいま、そういう、やめる自由のない集団になってしまっているのです。もちろん学校も、メリット・マイナスの両面があります。いい点をあげれば、字が読めるようになる。勉強

ができるようになる。メリットはたくさんあるはずなんです。ですから、少々のマイナスだったら、まあそれなりに我慢しなければならぬのかもしれない。マイナスがあってもプラスが大きいからがんばっていこうと思うはずなんです。でも、そうならない。

その理由はまず、こういうプラスがありますよ、ということをきちんと説明していない。今やっている勉強が将来どんなに値打ちがあってもどんなに役に立ってどんなに楽しいか、教える側が伝えていない。教える先生たちが、そのことを確信していない。確信していれば、先生の顔つきを見て生徒はついてくると思うのですが、だんだん確信できなくなっちゃったんですね。

いろいろ原因があると思います。塾が普及して、授業で何をしゃべっても生徒がびっくりしてくれない。テレビを見てみんな知っている。手作りの授業で毎日毎日子どもを引きつけるのは大変です。ということで、ませている子どもはそんなこと知っていると馬鹿にするし、よくわかっていない子は難しすぎてついてこれない。こういうことになっているわけです。

もう少し根本の理由を言えば、教育の根本はやはり人間——人間であるところの教員と子ども達、たまさか会っていろいろ意外なやりとりをするところにあると思うんです。けれど、その感覚が薄れている。特に先生の側から失せているのではなからうか。これは特に、教員の管理が厳しい、自由がきかないというところに原因があると思うわけです。通達や省令はだいたいそうなんですけれども、昔出たものが消えてなくなることはまずないんですね。だんだん増えて行くばかり。教育の本質と関係ない、調査などの事務も増えて行くわけです。学校の管理運営が第一に大事で、先生は二の次、生徒は三の次みたいになっているわけですね。これを子どもの方から言えば、何で

こんな細かいことを言われなくてはいけないのだろう、という規則づくめの状態になっていく。規則はなんのためにあるのか子どもの頭で考えてわからない。大人の頭で考えてもわからないらしい。大人が教育の話をしているのを聞いていると、どうやら学校や先生の悪口を言っている。親もあんまり学校を信頼していないらしい。じゃあ自分は何で学校に行っているんだろう、とこういう感じになってしまう。

一度そういうふうな歯車が回り始めると、お互いにどんなに努力してもうまくいかない。なぜうまくいかないのか。一言で言えばそこに人間がないからです。人間らしい扱いを受けている気がしない。もちろん教える側もそういうことは何とかしようとは思っていて、心の教育だとか言いますね。ところが逆に、言えば言うほど上滑りになって不信が深まるばかり。こういう構造があるんじゃないか。個々の先生がよくやっていることは私はよく知っているつもりですが、個人の努力ではどうしようもない、これはシステムの問題なのです。

## 学校は学力をつける所

関 こんな学校だったらいいのにな、と思われるような学校はどんな学校でしょうか。

橋爪 学校のメリットとは何か。それは、不得意な科目でも勉強が一応できるようになる、ということではないでしょうか。学力偏重と言うけれど、学校は学力をつけるところでそれ以外のことは二の次三の次、五の次である。それ以外のことはどうでもいいとさえ思います。

アメリカを例にとれば、アメリカの公立学校の一番の問題点は生徒の学力がつかないことでしょう。学力がつかない、英語の読み書きができないまま高校を卒業してしまう生徒がたくさんいるわ

けです。これでは就職口がない。まさに人権問題です。

日本の場合には曲がりなりにも学力がついて、アウトローと呼ばれる人たちもみんな字が読める。これがアメリカと違う点だと思います。これは学校教育の成果なんですね。でも、スポーツ新聞が読めるだけでは、就職ができない。それ以上の学力ってなんだろう、世の中だんだん進んできますから、小学校・中学校が基礎だと思いますけれど、そこできちんと勉強しておいたから一生安心できる。字が読める、書ける、英語だったら話せないまでも読んだら意味の分かる単語がいくつもある。基礎の基礎ですね。それから理科・社会、世の中の仕組みや自然の仕組みについて基本的なことを分かっている。理科の常識試験というのがあったのをご存じだと思いますけど、小学生を対象に理科や算数の達成度試験をするわけですね。その後、大人を対象に理科の常識試験をやってみる。例えば太陽は核融合しているとか、石ころなんかの無機物から生命が生まれることはないとか。そういう試験をやってみると日本人の成績はかなり低いんです。昔習ったはずのことは蒸発してしまっているらしい。知識としては、学校にいたあひだは分かっていたらしいんですが、自分の頭で理屈で体得してないから身につけていない。

**関** 学力をつけるというのは？

**橋爪** 学力というのは、学校学力ではなくて、卒業してからの学力のことです。学校にいるときの学力は極端な話、どうでもいいわけです。卒業してから何ができるかが一番大事でしょう。

ということで、私が考える学校とは、学力をつけてくれるところ、そしてそれ以外ごちゃごちゃ言わないところ。一人ひとりに合わせて教えてくれる、そういう学校だったらいいかなと思います。

## 選択・責任・連帯

**関** 新しい教育をつくり出すんだったら、失敗の責任をとれる人たちつまり、親や教師や学生・生徒・児童、こういった人たちが自由に制度を選択し、自由にその中で生きていく、というふうに書かれています。キーワードである選択・責任・連帯について説明して下さい。

**橋爪** 考え方の根本は、失敗の責任をとれる人が選択（意思決定）すべきだ、ということなんです。

私は学校は、矛盾した二つの要素の組み合わせだと思っています。ひとつは教育、教育者としての要素がある。校長先生にしる担任の先生にしる、大人を代表し上の世代を代表して、子ども達の前に立つのです。世の中の仕組みはこうだ、道徳はこうだ、算数はこういうふうを考えるんだと、教える。これは、人間としての力がにじみ出てくる、そんなふうな作業ですね。ちょっと待ってくれ、と言う時間は子どもの前ではないわけです。その場が勝負だ。私がこう言うんだから信頼して下さい。ですから、先生の後ろにはいろんなものがないほうがいい。寺子屋式ですね。

さて、もうひとつの要素。それは官僚制なんです。官僚制というのは、まず学校は組織です。校長や教頭がいて、いろんな委員会がある。個人プレーは慎まなければいけないけれど、いまの学校はその反対に、学校中同じ、日本中同じ。日本中どこへ行っても同じ教育をするために、先生たちも自分をコントロールしなければいけない。自分で自分をコントロールするだけでなく、監視監督されるわけです。それには、法令があつて監督者がいてチェックもあつて、上を見上げると市町村の教育委員会があり県の教育委員会があり文部省の何とか課があり、気の遠くなるようなピラミッドになっている。がんじがらめでしょう。他の

役所もそうである以上、学校も役所であることを強いられる。力学のせめぎ合いになります。上を見るヒラメ先生か、生徒を見る熱血先生か。全ての人に両方の要素があるわけでしょう。組織の宿命だから両方なくちゃいけない。どちらを重視すればよいか、官僚制の要素が勝ってきたら教育は死ぬわけです。今はとっくにその分岐点を通りすぎている。官僚制の要素が強すぎる。自分で責任をとりたくない、責任をとれない。教育の失敗を認めたくない。事実を認める勇気がないわけです。自分で何か決めたくない、こういう心理が現場に蔓延している。となると、当然これは子どもに悪影響を与えるわけです。教育の場としてこれほどまずい状態はない。

じゃあどうすればよいか。上をなくせばいいのです。学校の中に校長先生がいて「学校の中の問題は私が責任をとるから私が解決します」と、人間の顔を持って、問題を解決する。中小企業の社長さんみたいなものです。経営を任せられ、とりあえず私を信頼してついてきて下さい、とチームを率いる。子どもがいじめられたら、校長先生のところに怒鳴り込めばいいんですね。何とかしなかったら校長先生はクビです。教育委員会が守ってくれるんでなく、校長先生が自分の実力でみんなに信頼されているのであれば、何とかできるわけです。先生方と信頼関係で結ばれているから。それには校長先生が、人事権を持つことが大事でしょう。校長先生が、これはと思う先生を集めれば、気心も知れている。もし先生が校長先生の期待に応え、教育をしっかりとしなければ、来年から来なくていいよと言われるだろうし。本当に足を引っ張ってしまえば、学校全体の評判が悪くなって校長先生もろとも配置転換と言うことになってしまう。そういうことで、官僚組織をなくしてしまう。上をなくしてしまって、学校単位で自立した組織にするということが大事です。これが選



択・責任です。

その根本が親だと思います。校長先生はいま、教育委員会・文部省の方を向いちゃっている。そこが雇っていますからね。だけど、親が相談してこの校長先生にしよう、親と子どもと校長先生・教頭先生・いろんな先生がスクラムを組めれば、教育が再生する。同じ人たちがやっても前よりずっとうまくいく。これが選択。選択ってというのは、自分でものごとを決めるということです。責任は、なにかまずい結果が起こったら自分がその職務を離れることも覚悟することです。自分のポジションを守りつつ親は親、子どもは子どもで役割がある。校長先生は校長先生で快適に教えられる環境を用意する責任がある。そうした役割をお互いに果たして信頼関係で結ばれる。これが最後の、連帯ということなんです。

## 選択のチャンスがあること

**関** 日本人が選択する能力を持つためにどうすればいいと思いますか。

**橋爪** 選択する能力は、立派にあると思いますよ。選択するチャンスがないだけなんです。選択する能力があるかどうか選択してみるまで分からないですね。

話をわかりやすくするため、結婚にしましょう。

昔は選択のチャンスなんかなかったでしょう。親が決めて結婚させられるわけです。少なくとも選択するチャンスって、限りなくゼロですね。選択のチャンスがあったら、じゃあどうやって選択しようかなってみんな考えるでしょ。それでいろいろやりながら、それなりにみんな結婚しているじゃないですか。ということは選択の能力があったことになりませんか。もうちょっと言うと選択のチャンスがあると、選択の能力を自分で育てることができるようになるわけでしょ。江戸時代だったら、こんな変な結婚をしてしまったのは親のせいだといういろいろごちゃごちゃ文句を言うことができるけど、自己責任になれば人のせいにはできないですね。となると慎重になります。慎重になると、賢明な選択になるわけです。結論は同じでも、プロセスが違う、その充実してくるわけです。

じゃあ教育の場合はどうですか。小学校はほとんど親の世界で、子どもの意志なんてないに等しいかもしれない。でも最低限、子どもも納得していなければ、毎日学校へ行きませんよ。中学・高校、まして大学となれば、本人の自由意志の割合はきわめて大きいでしょ。大学なんか本人の自由意志がなければほとんど行けるところじゃないですよ。ところが今、親が言うからとかいろいろな理由で大学に仕方なく来ている学生が大勢いる。大学を志望すれば、そしてコストを払えば、自分の責任で大学に行けるって言うシステムを作っておくことが大事です。

### 個々に合わせる柔軟さを

関 「学校が個々に合わせた教育をする」とおっしゃっていますが、現場の先生方にメッセージがありましたらお願いします。

橋爪 今のやり方だと自由がないので、いろいろな言っても気の毒な面があるんだけど、現場の先生

方は必要以上に自縄自縛になっているということがあるかもしれない。やっぱり学校の先生は、多くの場合教育学部を出て先生になって着任して、教育一筋でやってきて、学校以外の世の中をあまり知らないということがある。学校の先生というパターンが知らず知らずできあがってしまっている。これはやむを得ない面もあるけれど、あまりよろしくない。世の中のいろいろの集団と、できれば共通した価値観やルールを学校が持っていることがのぞましい。学校の中での決まり事は、学校だけのものであることは望ましくない。ほかでも通用することが望ましい。世の中で通用するルールを学校でも教えることが大事です。昔、軍隊が軍隊の中だけしか通用しない文化を作って、困ったことになりましたけど、学校も下手をするとそんな感じになりそうだし、いやもうなっていると思います。そうするとどうなるかというと、学校はこういうものなので、君たちは学校に合わせなさい、という暗黙の期待みたいなものをついついもってしまうのですね。これをなるべくなしにして、どんな子が入ってきても動じないで欲しい。例えば日本語が全然できない子が入ってきたとする、それから、茶髪の子が入ってきたり、留学生の子が入ってきたりする。それから日常習慣が違う子が入ってきたりする。それから各家庭のプリンシプルがある。これは尊重せざるを得ない。これが学校のスタイルじゃなければいけないんじゃないでしょうか。学校がもっともっと柔軟になる必要がある。そうなることで、学校は個々に合わせた教育をしてほしい。そうすると、あ、この学校は家庭のこと個人のことをいつも注意して尊重してくれる、ということが分かるわけです。そうすれば、何か困ったことが起こったときに、先生に相談しようという余地が生まれる。

関 本日は、大変ありがとうございました。

(文責/関 勇豪)

おまけ

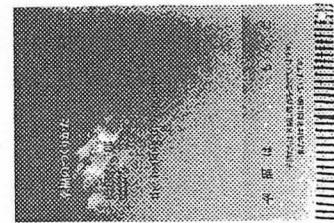
2001年1月15日

公明新聞

## 「教育改革」論議を考えるためのブックガイド

### 際立つ「学力低下」への危機感 硬直した大人のまなざしに注文も

一九九八年に社会経済生産性本部が出した「教育改革に関する中間報告書」は「大学入試の廃止」を打ち出したことに話題を盛んだ。大学が大衆化した現在では入試には意味がないとして、廃止したら学生定員の廃止や成績が基準に満たない者へのキックアウト制(留年・中退)の導入を提案している(この改革案は堤清二・橋爪大三郎共編著『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】』として出版)。この改革案の起草の中心になった東工大教授(社会学)の橋爪大三郎氏は『幸福のつくりかた』(ポット出版 一九〇〇年)【写真】の第一章「幸福な学校」で噛み砕いた形で「教育改革の基本的な考え」



「小・中学校の改革」「高校の改革」「大学の改革」について論じている。